

## 中国映画の通訳・翻訳の現場から

水野衛子

「鞆俐さんって、コン・リーさんが正しいんですか、それとも、Gong Li. だから、ゴン・リーさんとお呼びすべきなんですか？」と、鞆俐本人に向かって無邪気に尋ねたのは、若い映画ライターさん。一瞬目が泳いだ私が腹をすえて、「日本語

では外国人の名前をカタカナ表記するのだが、カタカナには濁音と清音というのがあり……」と中国語で延々と説明をした挙句に返ってきた鞆俐の答えは、「我是鞆俐」のひと言だった。当然である。そもそも、カタカナ表記された中国人の名前を日本人がフラットに発音しても、当の本人は自分のことだとは分からない。「チアン・ウエンとは俺のことか」と言っただのは姜文である。ああ、それなのに、

映画のパンフレットや雑誌などでは中国人俳優や監督の名を漢字を併記するのはなく、カタカナだけで表記するのが普通だ。

毎年通訳を担当している東京国際映画祭では、ティーチンという、舞台上の監督や俳優と観客席とで行われる質疑応答コーナーがある。質問する観客が四声をまったく無視して、「リー・イーチュンに似ていますね」と若いボーイッシュな女優さんに言えば、「李宇春のことだな」と瞬時に理解し、「ランユーを思い出しました」と監督に言えば、「ああ、『藍宇』のことね」と間髪おかずに察知する自分を、通訳というよりも超能力者ではないかと思うこともある。

自分が字幕の翻訳をしていない映画の来日取材通訳をする時にも人知れぬ苦労がある。配給会社のパブリシティが事前に用意する宣伝資料には、ほぼ一〇〇%カタカナ表記だけしか記載されていないため、スタッフ、キャスト、そして主要登場人物の名前の漢字表記を事前に調べておかないとならない。でないと、中国語の発音が分からず、通訳のしようがないからだ。スタッフやキャストの名前はそれでも長年のオタク知識とネット検索で事なきを得ることが多いが、登場人物名となると、事前に見た試写の日本語字幕も、人名はカタカナ表記であることがほとんどなので、その漢字を知るには結構手間がかかる。こういう時、字幕の

人名が漢字にカタカナのルビ表記だったらどんなに助かるだろう、といつも思う。

そのため、自分が字幕翻訳を担当する場合は、「人名表記は漢字にカタカナでルビでいいですか」と聞くことにしている。しかし、「OKです」と言われることは、まずない。たいていは「いや、カタカナ表記にしてください」と言われるか、あるいは、百歩譲ってという感じで、「初出は漢字カタカナルビにして、二回目以降はカタカナ表記にしましょう」と言われてしまう。なぜ、字幕の人名はカタカナ表記が良いとされるのか。漢字だと今の若い観客（ひよっとすると若い映画宣伝部員も）が嫌がるから、というのがその理由らしい。

最近の若者は一秒四文字の字幕ですら読むのが億劫という人が増えていて、シネコンで字幕版と吹き替え版を同時に上映すれば、吹き替え版のほうがチケットが先に売れていくそうだ。まして、中国映画で地名も人名も漢字だったりすれば、字幕が漢字だらけと受け止められ

て、それだけで若い観客に敬遠されると配給会社側は思うらしい。『HERO』は、それまで中国映画など見に行つたことのない若い観客層を動員したと言われている作品だが、「字幕に難しい漢字が多かった」という感想が若い人の声に多かったと後で配給会社の人から聞いた。「この作品はそれぞれの人名に意味があるので漢字で」と張芸謀監督本人から注文が入っていたし、邦題は英語になつたが、何しろ秦の時代の時代劇なのだから、どうしたって漢字が多くなるに決まっているのに。

しかし、考えてみれば、日本人は漢字名のほうが記憶に定着しやすいはずなのである。一つの作品の登場人物に「チェン」と「チャン」が出てきたら、カタカナではどっちだか分からなくなる恐れがあるが、「陳」と「張」なら識別しやすい。また、人名の漢字にはストーリーとも絡む意味がある場合が多いのだ。『初恋のきた道』の主人公の名は「招弟」と言い、男子の誕生を望む中国の農村の娘らしい

名前だった。だが、それを「チャオデイ」では字数が多すぎると言うので、最終的に「デイ」にされてしまったわけだが、そもそも漢字表記にしておけば済む問題なのに、と翻訳者の立場からも思う。

ピンインのカタカナ表記に関しては、実はこれといった標準がないのが現実だ。私が中国映画の通訳や翻訳に関わり始めた二〇年近く前には、岩波中国語辞典方式だが、竹内好方式とかいうものが存在するとかで、その方式によれば、中国語に濁音はないから、Zhangは「チャン」と表記し、「ジャン」とは表記しないのだと聞いたことがある。当時、中国映画の配給をほぼ一手に引き受けていた東光徳間映画会社はその方式を取っていたと記憶する。そのため、東光徳間が日本に紹介した第五世代監督たちの名も、張芸謀は「チャン・イーモウ」、陳凱歌は「チェン・カイコー」、田壯壯は「ティエン・チュアンチュアン」となつたらしい。

しかし、その東光徳間もなくなり、さまざまな映画配給会社が中国映画を配

給するようになった現在は、例えば、「Zhang」の表記は「チャン」も「ジャン」も両方が使われていて、ややこしいことに、「Jiang」は「チアン」と「ジャン」を併用している。他にも映画会社や宣伝担当者によって様々なカタカナ表記が使われているので、日本で知名度の低いキャストやスタッフの場合、同一人物なのに作品によっては異なったカタカナ表記をされることも少なくなく、それが同じ人なのか、よく似た名の別人（中国人の名にはこれがまた多い）なのか、なかなか判断できにくいという問題が起こる。

『単騎、千里を走る』が公開された時、同作品に姜文が出演しているという噂が立ち、実際にそう書いた映画紹介記事もあった。というのも、同作品で主演の高倉健の通訳兼ガイド役を演じた素人の女の子の名前が「蒋雯」と言い、キャスト表には「チアン・ウエン」とあったからだ。こうした混乱や不便を避けるためにも、中国人名は基本的に漢字表記にし、どうしても中国語に近い音で読みたい人

のためにカタカナでルビをふるのが一番だと思う。

ところで、「チャン・ツイイー」という不思議なカタカナ表記はどうして生まれたのか。これは、『初恋のきた道』がベリン国際映画祭で銀熊賞を取り、そこで世界デビューした新人女優「章子怡」の「Zhang」を映画祭レポートを書いた某ベテラン映画ライターが英語読みなのかドイツ語読みして、某女性ファッション誌の映画特集号に書いたことに始まる。当時、その記事を読んで、「何だ、このツイイーって表記は」と思っていたら、あっという間に本人がスターダムにのしあがり、「ツイイー」もマスコミに定着してしまった。外国語イコール西洋語人間の中国語のピンイン表記に対する傍若無人ぶりを表す好例だ。

字幕翻訳を担当すると、宣伝資料やパンフレットに載せるスタッフ・キャスト表のカタカナ表記チェックもついでに頼まれる。中国語の映画字幕を中国語から翻訳する映画会社は、さすがにピンイン

表記がローマ字ではないことを知っているから。ひどいのは、字幕も英語から翻訳し、スタッフ・キャスト表も英語至上主義の宣伝部員が躊躇なくローマ字読みにして、カタカナ表記にした場合で、『Zhang』を何の疑問もなく「ヤン・ニー」と表記してしまう。そして、それで女優名を覚えたライターさんが、他の作品に彼女が出ていても「ヤン・ニー」と表記するようになり、いつの間にか間違った表記が定着してしまう。「閻妮」という女優を知らない中国語のできる人は、「楊妮とでも書くのかな」と思うことだらう。「楊妮」という有名女優がいないのが不幸中の幸い。「楊采妮」はいるが、彼女は台湾生まれの香港女優なので日本での通称は「チャーリー・ヤン」である。ちよつと、中国語のできる人にチェックを頼めば、こうした誤りは簡単に防げるのだが、そもそも中国語ピンイン表記がローマ字ではないという発想がないから困る。

そんなマスコミの独断専行による混乱

も、福嶋亮大さんが提案するカタカナ表記標準表があれば多少は改善が見られるだろうが、その標準表に照らし合わせるという手間を映画関連マスコミがどれだけかけるかどうかは疑問である。映画業界の中国人名カタカナ表記問題は日本人にすでに根強い欧米中心主義と漢字力の低下に根拠があるからだ。「ハリウッドに対抗してアジアの映画人の結集を」となどと宣伝文句で謳っているわりには、アジア中心主義も自国の文化尊重もお題目だけというのが日本のマスコミだ。

ところで、最近是中国と韓国のコラボや共演作品も多く、韓国人名のカタカナ表記が中国語通訳者にとってはこれまた悩みのタネだ。韓国人には自分の名前すら漢字でどう書くのかわからない人が多い。そういう時は中国語ネットサイトで韓国芸能人情報を検索して、話題に出てくる可能性のある韓国監督や俳優の中国語表記リストを作らなくてはならない。それにしても、韓国人自身も知らない韓国人名漢字名をきつちりと漢字表記する

中国メディアはすごい。

そして、これは映画ではなく、日中韓国の文学者シンポジウムの同時通訳をした時のこと。映画とは違って、日本では中国人の作家名はなぜか「ろうしゃ」「おうさく」というように音読みにする。リレー通訳をしていて、隣のブースの韓国人通訳の韓日通訳に耳を澄ましていたら、「ばうげん」と何度も言うので、「暴言って、何のこと?」と一瞬考えてから、笑ってしまった。「莫言」を一生懸命、日本人のために音読みにしようとして、「莫」が普段あまり使わない漢字であるため、「ばくげん」という読み方が出てこなかったものらしい。どこの国の通訳にも人名表記に関しては悩みがあるものなのだあと感じた次第だが、韓国語通訳さんたちは日本の新聞が中国の著名人名を漢字表記にして、「しゅうきんぺい」「はくきらい」と音読みをルビをつけるのもやめてほしい、と言っている。原音の発音が分からないからだ。中国の人名と地名は「漢字に原音に近いと思わ

れるカタカナルビ表記」、これがすべての通訳の希望であることをここに記しておきたい。かの故ロシア語通訳米原万里さんも「Heilongjiang」と言われて黒龍江、「Lixue」と言われて魯迅のことだと誰が分かる?」と書いていた。

そういうわけで、私の結論は、中国人名は必ず漢字で表記し、福嶋さん提唱のカタカナ表記標準表にしたがってカタカナでルビを振るのが、通訳・翻訳者にとっては一番好ましいということだ。観客や読者にとっても、結局はそれが一番混乱のない方法なのではないだろうか。

(みずの・えいこ 中国語通訳・字幕翻訳家)

※

シリーズ「現代中国語のカタカナ発音表記をめぐって」では、「中国語音節表記ガイドライン」[平凡社版](二〇一一年八月) <http://www.heibonsha.co.jp/cn/> をふまえて、今後の課題や関連する問題についてご寄稿いただいております。